

批評・評論 I

- | | | | |
|------|-----------|---|------|
| I | イギリスの批評 | 1 | 前川祐一 |
| II | イギリスの批評 | 2 | 山内久明 |
| III | イギリスの批評 | 3 | 前川祐一 |
| IV | イギリスの批評 | 4 | 岩崎宗治 |
| V | イギリスの批評 | 5 | 出淵 博 |
| VI | アメリカの批評 | 1 | 酒本雅之 |
| VII | アメリカの批評 | 2 | 川崎寿彦 |
| VIII | シェイクスピア批評 | | 柴田稔彦 |

講座 英米文学史第12巻 © Y. Maekawa, H. Yamanouchi,
批評・評論 I S. Iwasaki, H. Izubuchi,
M. Sakamoto, H. Kawasaki,
T. Shibata 1971

1971年12月1日 初版発行 円 1200

責任編集 外山滋比古



著者 前川祐一 山内久明
岩崎宗治 出淵 博
酒本雅之 川崎寿彦
柴田稔彦

発行者 井上 堅

発行所 株式会社 大修館書店

101 東京都千代田区神田錦町3-24

電話 東京 (291) 3961~8 振替 東京 40504

組版・印刷 大文堂 製本 謙文社
装幀 原 弘 3398-140820-4305

目 次

I イギリスの批評 1

——イギリス批評文学序説 (前川祐一).....I

1. エリザベス朝時代の批評——フィリップ・シドニー3
2. イギリスの批評の展開 ——ドライデン..... 8
3. 新古典主義からの脱出 ——サムエル・ジョンソン.....II

II イギリスの批評 2

——ロマン主義時代 (山内久明).....I5

はじめに.....I7

1. ワーズワスとコールリッジ.....I8
 1. 急進主義とその変質.....I8
 2. *Lyrical Ballads* 序文.....20
 3. *Biographia Literaria* と想像力の問題.....22
 - i. *Biographia Literaria* の成立22
 - ii. 問題の背景23

vi 目次

iii. 第1次想像力	25
iv. 第2次想像力——相反物の和合	26
v. 第2次想像力——有機体的芸術	28
vi. 詩と科学	30
vii. ワーズワス論	30
viii. 想像力説の意義	32
4. 政治と宗教	32
2. 文芸雑誌の隆盛	35
3. ラム, ハズリット, ハント, ド・クウィンシー	38
1. ラム	38
2. ハズリット	40
3. ハント	43
4. ド・クウィンシー	43
4. ピーコック, シェリー, キーツ,	46
1. ピーコック	46
2. シェリー	47
3. キーツ	47
おわりに	49

Ⅲ イギリスの批評 3

——ヴィクトリア朝時代(前川祐一)51

1. ヴィクトリア朝時代の社会的背景	53
2. ヴィクトリア朝時代のモラリストたち	56
1. ミルの回心	56
2. ニューマンとオックスフォード運動	60
3. アーノルドの教養主義	66
3. ヴィクトリア朝時代の予言者たち	74
1. カーライルの歴史観	74

2. 芸術から社会主義へ——ラスキンとモリス……………	80
4. 世紀末の批評家たち……………	90
1. 世紀末概観……………	90
2. ペイター……………	93
3. ワイルド……………	97

IV イギリスの批評 4

——1900—1930 (岩崎宗治)……………	103
-------------------------	-----

はじめに……………	105
-----------	-----

1. 過渡期の批評——1900—1910……………	106
1. エドワード七世時代の文学理念……………	106
2. ブルームズベリ・グループ……………	109
3. アーサー・シモンズと新しい文学理念の誕生……………	111
2. 古典主義の主張——T. E. ヒューム……………	113
1. ベルグソニズムと反ヒューマニズム……………	113
2. 抽象芸術, イマジズム, 古典主義……………	116
3. 古典主義の批評——T. S. エリオット……………	117
1. 「伝統」論前後……………	117
2. 反印象主義……………	121
3. <感性の分裂>論とその周辺……………	123
4. 宗教的態度……………	125
5. ダンテ, シェイクスピア, そして<詩と信念の問題>……………	128
4. 批評におけるロマン主義——J. M. マリ……………	131
1. 直観的認識—Dostoevsky まで……………	131
2. <i>The Problem of Style</i> ——感情とその伝達……………	134
3. <i>Countries of the Mind</i> ——モラリストの立場……………	136
4. キーツ, シェイクスピア, ロマン主義……………	137

5. 古典主義とロマン主義のあいだ——ハーバート・リード…	139
1. 批評と精神分析学…	139
2. 理性と共同体の主張…	142
3. ロマン主義への転向…	144
6. 分析批評の基礎——I. A. リチャーズ…	146
1. 言語、価値、伝達…	146
2. 詩と科学文明…	150
3. 詩の解釈…	151
7. 小説批評の発生と展開, その他…	155

V イギリスの批評 5

——1930年以降(出淵 博) …	159
-------------------	-----

はじめに …	161
1. エンプソンの場合 …	163
1. <i>Seven Types of Ambiguity</i> …	163
2. <i>Some Versions of Pastoral</i> …	171
3. <i>The Structure of Complex Words</i> …	174
2. 神話・原型批評の場合 …	176
1. モード・ボドキン他…	176
2. ウィルソン・ナイト…	183
3. W. H. オーデン …	186
3. 言語学的批評——構造をめざして…	193
1. エリザベス・シュウエル…	193
2. ドナルド・デイヴィとクリスティン・ブルック＝ローズ…	201
3. 小説の言語学的批評…	206
おわりに …	208

Ⅵ アメリカの批評 1

——19世紀まで(酒本雅之)…………… 211

1. 前史……………	213
2. 国民文学よ起これ……………	216
1. フランクリン……………	216
2. コネティカットの才子たち……………	217
3. デニー……………	218
4. ニール, ダンラップ, その他……………	218
5. ブライアント……………	221
6. チャニング……………	223
3. お上品な伝流……………	226
1. ローウェル……………	226
2. ホームズ……………	228
3. ロングフェロー……………	229
4. クーパー, その他……………	231
4. 「アメリカ」は詩……………	233
1. アリソンの連想論……………	234
2. 文学有機体論……………	237
3. エマソン……………	238
4. ホイットマン……………	240
5. 「アメリカ」を求めて……………	242
1. ソロー……………	242
2. メルヴィル……………	243
6. 「アメリカ」を逃がれて……………	245
1. ホーソーヌ……………	245
2. ポー……………	247
7. リアリスト登場……………	250
1. ジェイムズ……………	250

x 目 次

2.	トゥエイン.....	253
3.	地方色作家たち.....	254
4.	ガーランド.....	255
5.	ハウエルズ.....	256
8.	ナチュラリズム——現実の深部への下降	258
9.	「芸術」の防衛	260
1.	ステッドマン.....	260
2.	サンタヤナ.....	261

VII アメリカの批評 2

——20世紀(川崎寿彦).....	265
-------------------	-----

1.	文学研究の隆盛	267
2.	ネオ・ヒューマニスト運動	269
3.	マルクス主義的批評	274
4.	ニュークリティシズム ——その起源.....	279
5.	ニュークリティシズム ——その理論.....	284
6.	ニュークリティシズム ——その実践.....	288
7.	シカゴ派(新アリストレス派)批評家	290
8.	象徴主義的批評	297

VIII シェイクスピア批評(柴田稔彦)..... 309

はじめに	311
------------	-----

1.	ベン・ジョンソン	313
----	----------------	-----

2. ドライデン その他	316
3. ジョンソン博士	320
4. モーガンとシュレーゲル	323
5. コールリッジ その他	327
6. ブラッドリー	333
7. ストール	337
8. ウィルソン・ナイト	340
9. フライ	346
10. グランヴィル・パーカー	351
参考文献	357
事項索引	375
人名・書名索引	380

図 版 目 次

<i>Biographia Literaria</i> 初版本の扉	facing	20
<i>Biographia Literaria</i> 初版本巻頭ページ	//	21
<i>The Savoy</i> 第1号の表紙	//	84
<i>Sketches and Reviews</i> 初版本の表紙	//	85
<i>Speculations</i> 初版本の扉	//	116
<i>Practical Criticism</i> の扉	//	117

I イギリスの批評 1

——イギリス批評文学序説

前川祐一

1. エリザベス朝時代の批評

——フィリップ・シドニー

16世紀のイギリス人は、イタリア人やフランス人のあとをうけて詩の美学の解明に手を染め、やがて詩法の研究と詩文学の弁護を経て、古典主義的文学論を確立していった。

たとえば、トマス・ウイルソン (Thomas Wilson, 1525-81) の *The Arte of Rhetorique* (『修辞法』, 1553) は、ラテン語全盛のこの時代に、学問上の問題にも母国語を、それも平易な母国語を用いるべきことを説いて、それゆえに、後にトマス・ウォートン (Thomas Warton, 1728-90) によって、「英語による最初の批評書であり、批評論である」 (the first book or system of criticism in our language) と呼ばれたが、にもかかわらず修辞法に関しては15世紀イタリアのヒューマニストたちの説を踏襲したものであったし、厳格なピューリタンで大のイタリア嫌いできこえたロジャー・アスカム (Roger Ascham, 1515-68) でさえも、*The Scholemaster* (『教師論』, 1563-68) の中で展開した修辞に関する論議のほとんどは、イタリア人のそれを英語に適用したものにすぎなかった。

やがて人々の関心がイギリス人のための英語個有の詩形や修辞の探求にすむに従って、新しい批評が相ついで出現するに至る。パトナム (Richard Puttenham, 1520?-1601?) の *The Arte of English Poesie* (『英詩法』, 1589) はその代表的な作品で、英詩の形式や主題、さらには修辞上の比喻を、はじめて系統的に分類するなど、詩のもつ文学的機能について従来にないすすんだ分析を示している。がしかし、ここでもまたパトナムは、自分がフランスやイタリアやスペインの宮廷で生活したことがあって、これら外国の言葉にも通じていることを自ら告白しているし、彼の詩論にはこ

れら大陸の旅行や学問の影響が著しいことが明白である。詩は、最もすぐれた場合には、無から有を造りあげる芸術であって、その意味では詩人は、いわば神にもたとえられるべき創造者である。さらに詩は、それが眼をむける森羅万象を真実のままに生き生きと描いてみせるという意味では、一種の模倣の芸術であり、詩が完璧の域に達するためには、神聖なる天分、卓越せる自然、現実世界に対する広範なる観察と体験が必要である。したがって詩人たるものは第一級の牧師、予言者、現世の立法者であり、第一流の哲学者、科学者、雄弁家、歴史家、音楽家であったという。これらの彼の詩論、詩人観は、たとえばイタリア生まれのフランス人スカリジェ (Julius Caesar Scaliger, 1484-1558) の詩論から直接の影響を受けたものだという。

が、このような詩に対する認識と賛辞が高まっているあいだにも、ピューリタンたちによる詩と劇詩に対する激しい攻撃が準備されていた。ゴッソン (Stephen Gosson, 1554-1624) の *The Schoole of Abuse* (『悪弊学校』, 1579), フィリップ・スタブズ (Philip Stubbes fl.1583-91) の *The Anatomie of Abuses* (『弊害の解剖』, 1583) などがそれだが、特にゴッソンの *The Schoole of Abuse* はその攻撃に対する反論の形で、フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney, 1554-86) の *The Defence of Poesie* (『詩の弁護』, 1595) が書かれたという意味で重要である。〔当時詩に対する攻撃に答えたものとしてはシドニーの *The Defence of Poesie* のほかにも、ハリントン (Sir John Harington, 1561-1612) の *Apologie of Poetrie* (1591), ダニエル (Samuel Daniel, 1562-1619) の *Defence of Ryme* (『押韻の弁護』, 1602) などがあった〕ゴッソンは当時の道徳的退廃をなげく一個の理想主義者で、かつてのイギリスを支えていた厳しい倫理的規律にくらべると、彼の時代のイギリス人たちが「ギリシアから大食いの習慣を、イタリアからみだらさを、スペインから高慢さを、フランスから欺瞞を、オランダから大酒飲みのくせを奪って」¹⁾ 墮落してしまったことを悲しんだ。そしてかかる道徳上の墮落の兆候が詩と劇詩において著しいという理由から、このふたつの文学ジャンルに対して攻撃の筆をむけたのであった。

そこでこれに答えたフィリップ・シドニーの *The Defence of Poesie* だ

1) Joel E. Spingarn : *Literary Criticism in the Renaissance* (1899), A Harbinger Book ed., 1963, p.169.

が、スピングーン (Joel E. Spingarn, 1875-1939) によれば,¹⁾ その特徴のひとつは、イギリスの批評において、これがはじめてアリストテレスの『詩学』をイギリスに紹介した点にあるという。これまでイギリスの詩論は主としてホラティウスのそれにもとづいたものであった。もちろんアリストテレスへの言及もないではなかったが、それはすべてときおりの偶発的な言及にすぎなかった。それに反してシドニーは、彼の詩論の核心をアリストテレスに学び、その土台の上に詩の弁護論を構築している。その意味で *The Defence of Poesie* はイタリア・ルネッサンスの文学批評の典型であるばかりでなく、「イタリア・ルネッサンスの精神を完全に吸収したという点で、イタリア、フランス、イギリスのいかなる作品といえども、ルネッサンス批評の気質と原理に関するかくも完璧にしかくも高貴なる観念を読者に提供するものはほかにはない」というのである。

詩は、…、模倣の芸術である。というわけは、アリストテレスが「ミメシス」という言葉を用いて詩をそう名づけているのであって、「ミメシス」とは、すなわち「再現」とか、「模造」とか、あるいは「描出する」という意味なのである。比喩的に言えば、教えかつ楽しませるという目的をもった、物を言う絵ということである。²⁾

詩を「模倣の芸術」と定義することを認めれば、韻律の問題は第2義的なものとなる。

確かに詩人たちの大部分は、彼らの詩的発明に「韻文」と呼ばれる韻律のある文体の衣を着せてきた。それは本当だが、しかし、衣でしかなかったのである。韻文は詩にとっては単なる飾りであって、決して本質ではないのである。たとえば、多くの最もすぐれた詩人たちが1度も韻文を用いたことがないという例もあれば、今日、詩人の名にまったくあたいたくない韻文作者がうようよしているのである。³⁾

韻文の問題が詩における本質的なものでないということが明確になれ

1) *Ibid.*, pp.170-71.

2) Sir Philip Sidney: *The Defence of Poesie* (1595), *The Complete Works of Sir Philip Sidney*, ed. A. Feuillerat, Cambridge, U. P., 1923, p.9.

3) *Ibid.*, p.10.

ば、詩の本質は当然その倫理性に求められることになる。「教えかつ楽しませるといふ目的をもった、物を言う絵」としての詩である。このような詩の目的や機能に関しては、シドニーもまたスカリジェの見解を踏襲している。単に教訓的なものでもいけないし、楽しみを与えるだけのものでもいけない。このふたつの目的と機能を同時にみたすものとしての詩である。そして、詩が必ずしも韻文を必要としないとすれば、これは哲学や歴史に対してどのような優越性をもちうるのだろうか。これは古代からしばしば論争の種になった問題であった。それに対するシドニーの主張は、これまたアリストテレースを援用したものであった。すなわち、「哲学者と歴史家とは、一方は教条を用い、他方は実例を用いて、ともに最終目標をち取りとうとしている人々である。が、どちらも、教条と実例の双方をもちあわせてはいないから、どちらも片ちんばである」¹⁾ それに対してすぐれた詩人は、この双方を自由に用いることができるがゆえに、徳性の涵養に最も多く貢献するというのである。

さて、シドニーは以上の詩に関する考察を前提として、ゴッソンの攻撃に答えた。シドニーによれば、詩人にむけられた最も重大な非難はつぎの4点に要約されるという。第1は、人間にはほかにもっと実益のある知識がたくさんあるのだから、詩などよりもそういうほかの知識に時間を費すほうがよいのではないかというもの。第2は、詩は嘘を生む母だというもの。第3は、詩は悪弊の育ての親 (the nurse of abuse) であって、詩は人間の心をみだらなものにむかわせ、武士道からほど遠い文弱なものに変えることによって墮落させたというもの。そして第4に、人々は、まるで弓技でロビン・フッドを射ち負かしたかのように(as if they had overshot Robin Hood)、プラトーンは彼の共和国から詩人たちを追放したではないかとわめきちらすというのである。

第1の非難に対して、シドニーは、あらゆる学問の目的は美德を教えることにあり、詩はすべての芸術や科学以上に、人に美德を教え、人をそれにむかわせるものだから、この非難は問題にならないという。第2に関しては、天文学者、医者、歴史家など科学にたずさわるあらゆる人々のなかで、詩人ほど嘘をつかない、否、嘘のつけないものはいない。詩人は事実でないことを語りはするが、それを事実であるとしては語らない。あくま

1) *Ibid.*, p.13.